

宇治拾遺物語

説話文学の世界 第二集

説話と文学研究会編

笠間選書 120



笠間書院

《執筆者紹介》

長野	嘗一	立教大学教授
小内	一明	実践女子短期大学教授
高橋	貢	梅光女学院大学教授
上野	理	早稲田大学教授
増淵	勝一	文教女子大学短期大学部助教授
松村	武夫	都立立川高校教諭・武蔵野女子大学非常勤講師
矢作	武	相模女子大学助教授
鬼束	隆昭	宮城学院女子大学助教授
青山	克彌	金沢女子短期大学助教授
宮本	瑞夫	立教女学院短期大学専任講師
乾	克己	和洋女子大学教授
志村	有弘	相模女子大学助教授
北村	雅子	梅光女学院大学院生

笠間選書120 宇治拾遺物語

—— 説話文学の世界 —— 第二集

昭和54年 5 月31日初版第 1 刷発行

定価 1,500円

— 検印省略 —

編者 説話と文学研究会 ©

発行者 池田猛雄

印刷 三美印刷株式会社

製本 笠間製本所

発行所 有限会社笠間書院

〒101 東京都千代田区神田神保町 1-46

電話03-295-1331(代) 振替 東京 1-56002

書籍コード 1391-953120-0924

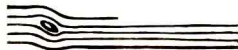
宇治拾遺物語

—説話文学の世界—

第二集

説話と文学研究会編

笠間選書 120



笠間書院

目次

伴大納言の説話——『宇治拾遺物語』の鑑賞と批評——（その一）……………長野 嘗一…五

「宇治拾遺物語」傳本の系統分類——付、冒頭語と同文的説話の関係——…小内 一明…三三

「宇治拾遺物語」の性格……………高橋 貢…六七

宇治拾遺物語と和歌……………上野 理…一〇三

『宇治拾遺物語』の対読者意識……………増淵 勝一…一三〇

『宇治拾遺物語』和歌説話の特色について……………松村 武夫…一四三

※

『日本靈異記』雜考——中国説話と関連して——……………矢作 武…一六二

京極御息所覚書……………鬼束 隆昭…一七二

『無名抄』成立年次試論——完成は長明最晩年か——……………青山 克彌…一九九

役者説話の方法——中村七三郎の場合——……………宮本 瑞夫…二三八

※

十訓抄と菅原為長再論……………乾　克己…三三

日藏説話の成立と展開——「十訓抄」編者菅原為長に関連して——……………志村　有弘…三五

※

説話文学研究文献目録（昭和五十二年度）……………北村雅子編…二八三

後記……………長野　　嘗一…二九四

伴大納言の説話——長野誉一

——『宇治拾遺物語』の鑑賞と批評——（その一）

一 伴大納言善男

伴大納言——およそ平安朝の歴史や文学に関心を持つ者で、この名前を記憶にとどめぬ人はいないだろう。官は大納言、それは王朝の廟堂では大臣に次ぐ高官ではあるけれども、千年という時間の距離をへだてた今日では、記憶の片すみにも残らないのが普通である。最高の官であった摂政・関白や太政大臣ですら、はたして何人の名前が記憶されているだろう。良房・基経・兼家・道長・頼通、この五人の氏名をおぼえている大学生が、幾人いるか。国文科以外の学生では、一パーセントもいまい。国文科の学生ですら、半分いるかどうか。

平安朝の高級官僚でいちばん著名であり、老若男女を問わず親しまれているのは菅原道真であろう。至誠にして風雅、無類の学才を認められて天皇輔翼の任にありながら、罪なき罪に問われて大宰府へ遠流、そこで生涯を閉じた悲劇がいたく同情を誘うからだ。北野に神と祭られて、文学や劇、縁起や絵画としても、その生涯があまねく語られたからである。

伴大納言も悲劇の人ではあるが、野心家でもあり、その野心が自己の墓穴を掘ったと見なされたことが、菅公のような同情をひかぬ理由であろう。日本人はとかく野心家タイプの人を好まない。野望を持つことは「悪」とさえ見られてきた。高風清廉、無為にして化するのが政治家の理想像であった。堯・舜は永遠に理想の聖天子であり、歴代の天皇も極力、摩擦や波瀾を避けて平穩を旨とするのが名君たる要諦であった。疑う者は延喜・天曆の治政を見よ。

ロボット化された天皇ならそれでもよい。が、実際に政柄を執る摂関や大臣・公卿・国守がこれでは困る。消極退嬰が弥漫しては政治が行き詰まる。まして行政の実務に当たる官僚が無為にして朝から茶ばかり飲んでいるようでは、国務はいっこうにはかどらない。

不幸にしてというべきか、幸いにしてというべきか、伴大納言はかかる無為無能の官僚ではなかった。法制に詳しく、弁舌はさわやかに、万事を敏腕迅速に処理する実務家である。それが仁明帝に認められて官位の急速な昇進となる。同時に、敏速な実務家には「待ち」の姿勢がない。一事を片付ければ、即刻次の仕事に取りかかる。それが自らの墓穴を掘った。

だから彼には「判官びいき」の同情がない。菅公のように有名でもない。藤原北家が権力を獲得してゆく祭壇に捧げられた犠牲の一つであるにかかわらず、元方民部卿のように悪霊となってもあらわれず、中関白家の没落にまつわるような哀史も伝えられていない。本来なら、さほど記憶の底に残るほどの人物ではないのである。

その彼が、とにかくにも平安朝の歴史や文学に関心を寄せるわれらの胸底に残るのはなぜか。

躊躇なく言おう。——それはひとえに『宇治拾遺物語』と「伴大納言絵詞」のためだ。この二つがなかったなら、彼はわずかに平安朝史を専門とする歴史家によって、数多い権力闘争の敗者として記録されるにとどまったであらう。

伴大納言の略歴や事績、人となりを、最も詳細に伝えるのは、『続日本後紀』と『三代実録』、なかんずく『三代実録』である。が、記録がもしこの二書にとどまっていたならば、彼の人間像は記憶の暗黒とまではゆかずとも、薄明の中に漂泊したにすぎないであらう。正史の記述は客観的たらしめればするほど、印象が薄い。しかも、史書の記述もまた後代の人間のしわざである以上、編纂筆録した人の都合によって歪曲や着色がなされやすい。

なるほど、説話や絵詞には、正史以上に誤伝や誇張が多い。その代わり、人間の生きた血が通っている。いや、たぎっている。絵詞に描かれた人びとの表情、たとえば応天門の火災を見上げる人びとの驚愕や、優免の勅使を断罪のそれと錯覚した左大臣家の女たちの悲歎、それらの表情はまさしく人間の感情の表出として画面に躍っているではないか。一皮切れば真っ赤な血が吹き出るほどの緊張がそこにはある。歴史の無味な記録の比ではない。『宇治拾遺』の説話については後に詳しく鑑賞するのでここでは省くけれど、一つだけ例を引こう。事件の真相を知っている右兵衛の舎人^{とわり}が、知っていないがら官に訴え出る勇氣を持たず、無実の左大臣が罪せられると聞いて気の毒とは思いつつも、なお口をつぐんでいるわが身かわいさのエゴイズム。それほどの彼が、子供の喧嘩につられて、つい口にした言葉が発端となって、事件はいっきよに解決する。その心理の移り行きが、心にくいまでに活写さ

れているではないか。こんな描写は史書にはとうてい期待できない。

芸術の偉大をまざまざと見る。さればといって芸術は歴史にまさると短絡する気はむろんない。歴史には歴史の使命があり、芸術には芸術の効果がある。が、伴大納言という人物、応天門炎上という事件を、一千年後のわれらの胸に刻印したのは、『三代実録』という史書ではない。『宇治拾遺物語』という説話集と「伴大納言絵詞」という芸術作品であることを、本論の最初にまず確認しておきたいと思う。事新しく揚言するまでもないとの声もあるかもしれないが、この当然なことをそれとしっかり認識しておくことが、われら文学研究の徒にまず課せられた使命であると信ずる。

二 伴大納言にまつわる二つの説話

『宇治拾遺物語』には、伴大納言にまつわる説話が二編収められている。第四話「伴大納言事」と第一一四話「伴大納言焼応天門事」の両話である（底本には書陵部本を用いる。但し、わかりやすいように句読点や「」を施し、表記も若干改めた）。

前者は伴大納言の若い時の話、後者は応天門に放火して自滅する話である。

三 若い時の話——夢占い——

まず、若い時の話から見てゆこう。――

伴大納言善男は佐渡国の郡司の従者であった。或る日、彼は奇妙な夢を見た。西大寺と東大寺をま

たいで立っている夢だ。目覚めて、彼はこの夢を妻に語る。妻は言う。「あなたの股が裂かれそうになつたでしょう」。縁起でもないと思つた善男は、その足で主人の郡司の家へ向かう。郡司は無双の相人であるから、かの夢を占つてもらおうと考えたのだ。

ところが、意外なことに、郡司の応対は、日ごろとは打って変わり、下にも置かぬ饗応である。円座を取り持ち、「さあ、さあ、これへ！」と、珍客を迎えるような待遇である。普通なら主人は縁に従者は庭に土下座するのが通例であるのに、これは主客全く対等、というよりも款待というべきもてなしである。善男は気味が悪くなった。もしや、こうして自分を縁に上げ、妻が言つたように股でも裂く魂胆ではあるまいか。……と思えば五体がわなないてくる。不安と恐怖に背筋も凍る。と、郡司は意外なことを言う。

「お前は大変な吉夢を見たものよ。やんごとなき高位に上るといふ夢じゃ。したが、つまりぬ人にそれを語つたのが玉に瑕。されば、お前は必ず高位の者にはなるが、事件が出来して罪を得るぞ」
こう言われても、善男には、何のことやらわからない。ただ、あの途方もない夢を、最初に妻に語るのではなかった、という悔いが残るだけであつた。

その後、善男は縁を頼つて京へ上り、官に仕えて出世街道を慕進、ついに大納言という高官に上る。しかし、そこで罪を得た。すべて郡司の予言の通りであつた。――

これがこの説話の筋である。原文はもっと簡潔だが、現代文に直すとこんなに長くなる。それに、私が言葉を補つた所もある。

これは、いわずと知れた占夢説話である。陰陽道にまつわる説話の中には、同型の話がすこぶる多い。微賤の者が高貴の位に、貧者が長者になるという躍進は、自分の階級が固定した社会では、とりわけむづかしい。むづかしいだけに、それが実現した時の喜びは想像を絶する。そんなことはめったにないのだが、もしあったならという空想を楽しむことはだれにもできる。富貴伝説、長者説話が、いつの世でも語り伝えられるのはそのためだ。

夢は今でも不明な部分が多いといわれるが、昔はそれを見た人の未来を予表するものとして、占夢、夢解きが行われた。『周礼』^{ちうり}によれば、古代の中国には占夢の官がおかれ、六夢の吉凶を占ったというが、『嬉遊笑覧』^ち八、わが国では占夢はもっぱら陰陽師の役であった。『今昔物語集』巻二十四の第十四話に、穀藏院の使として東国へ出張した官吏が、帰途、近江国勢多の駅で、陰陽師天文博士弓削^{ゆげ}是雄と偶然同宿し、その夜見た悪夢を是雄に解いてもらい、それによって一命を拾ったという話がある。是雄の占いによれば、明日家に帰れば、汝を殺害せんとする者がひそんでいるゆえ、明日の帰宅は取り止めたがよいという。しかし、長く旅にあったかの官吏にしてみれば、帰心矢のごとし、京を目の前にして数日の滞留を余儀なくされるのは堪えがたい。それに公私の物品も数多くたずさえている。どうしても帰りたい、難を免れるにはどうしたらよいかと尋ねる。そうまで帰りたいならと、是雄はその方法を教える。――汝を殺害せんとする者は家の丑寅^{うしとら}（東北）のすみに隠れている。されば汝は弓に矢をつがえて、曲者のひそんでいそうな所に向かい、「おのれ、今日東国より帰宅するわれを殺害せんとすることは百も承知なるぞ。早う出ろ！ 出なければ即刻射殺すぞ！」と言うがよい。さすれ

ば、事情がおのずから判明しよう。この教えの通り、翌日、彼の男はわが家へ帰り着くや、弓に矢をつがえて、丑寅のそれらしい所を探す。と、その方角の一間に薦こもを懸けた所がある。ここだッと思つた男は、「おのれ、今日わしの帰宅を待つて殺害をはかるとは不届き至極！ 早う出る！ 出なければ射殺すぞ！」と、どなる。その声におびえて薦の中からまろび出たのは、なんと一人の法師ではないか。さっそく糾問する。観念して法師は自白する。「実は、私の主人の御房と、こなたの奥方様とは、多年いい仲でございました……」とその法師は語り出す。事の意外に彼の男は息を呑む。「して、お前の主人がわしを殺せと命じたのか」「いいえ、命じたのは……」と法師は言いよどむ。「だれか！ 早う言え！」「それはこなたの奥方様で……」ええい、何ということ。妻が自分の殺害を命ずるとは……。

彼の男は、法師を検非違使庁へ突き出し、妻は離別した。ただひとり、生命の恩人弓削是雄に對しては、心からなる謝意を込めて礼拝を怠らなかつた、と語り伝えたことである。

「天文博士弓削是雄、夢を占ふ語」と題する話である。

右は陰陽師天文博士の占夢であるが、夢解きは必ずしもかかる正規の陰陽師の専売ではない。少しく陰陽道をかじつた者で、村の夢解きといわれた者も少なからずいたらしい。本編に登場する佐渡の郡司もその一人であらう。

同じく『宇治拾遺物語』の第一六五話に、「夢買人事」という話がある。

むかし、備中国の郡司の子に、「ひきのまき人」という若者があつた。或る夜、夢を見たので、その夢を合わせるために夢解きの女のもとへ行き、夢合わせをしてもらつた後、雑談していると、外に多

くの人声がして、この家へやって来る様子。見れば国守の子の太郎君が、数人の供侍を従えて来るではないか。年のころは十七、八歳、国守の長男だけになかなかの美男である。「まき人」は帰るに帰れず、奥の間へ引き込んで穴からのぞいていると、かの太郎君もやはり夢占いに來たらしく、見た夢を夢解きの女に語り、いかなる夢かと尋ねている。女は答える。「これは大変な吉夢でございます。あなた様は必ず大臣になられましょう。くれぐれも、この夢を他人に語られませぬように」と言うを聞いて、彼の若者は喜色満面、着衣を一枚脱いで女に与え、足取りも軽く帰って行く。

その時、「まき人」はやおら奥の間より姿を現わして女に言う。

「今の話、すっかり聞いた。夢は取るということがある。かの君の御夢を、わしに取らせてくれい」

「ま、そんな滅相なこと……」

と、女は一瞬ひるむ。が、「まき人」はあきらめない。

「そなた、よう考えてみやれ。国守は四年たてばここを去って都へ帰る。反対に、わしはこの国の人ゆえ、死ぬまでここにおるのだ。それに、わしも郡司の子、大事にして損はあるまいが」

利益と義理をもつて誘われれば、夢解きの女も弱い。

「仰せの通りにいたしましょう。では、かの太郎君がなされた通り、あらためてここへお入りになり、あのお方の語られた夢を、つゆ違^{たが}わず語られなされませ」

言われた通りに「まき人」はする。女も先刻と同じように夢解きをする。「まき人」は喜色満面、かの君と同様に着衣を一枚脱いで女に与えて去る。

その後、「まき人」は学問を積み、官吏登庸の難関を幾つも突破し、それが朝廷に認められて大唐国へ留学を命ぜられる。久しく彼の地にあって新知識を蓄えて帰朝すれば、帝はその学才を賞でて次第になし上げ、ついに待望の大臣になった。

反対に、かの夢を取られた備中守の長男は、官途にもつき得ずに終わったという。

されば、「夢を人に聞かすまじき也」といひ伝へたり。

と、「宇治拾遺」はこの話の大尾を結んでいる。

これは吉備真備の話ではないかといわれている。「ひきのまき人」と「きびのまきび」、誤伝や誤写の可能性が十分ある。郷国も同じ。が、そんなことはどうでもよい。ここで注目したいのは、「夢を取る」という行為が行われ、それが効果をあらわしているという一事である。他人の夢を取ってそれが効果をあらわすのは、「夢合わせ」「夢解き」が盛んに行われ、それが十分効果があると信ぜられていた証拠である。そうしてさらに、「夢」が未来を予表すると信ぜられていた証拠でもある。

われわれも時々、奇妙な夢を見る。何十年も前に袖すり合ったにすぎぬ人が、突如、夢枕に立ち現れることがある。フロイトによれば、夢は潜在意識のあらわれだというが、どうして思いもかけぬ人が夢の中に現れたのか、判断に苦しむことが多い。そこが潜在意識たる所以だといえはそれまでだが、そんなことを皆目知らなかった古代の人びとにとって、夢は実に神秘に満ちた不可解な現象であつたろう。未来を予表すると考えたり、それを解くことによって吉凶を判ずる材料としたのも道理である。さらに、同じ夢であっても、判じ方、解き方によって吉凶が分かれるとなしたのもうなずけよう。

四 反逆か守護か

西大寺と東大寺をまたいで立つ―善男が見た夢は、まさしく壮大な夢である。平城京の東北端にあったのが東大寺、西北端にあったのが西大寺だ。今の西大寺はさらに西へ移転したらしく、天平神護元年（七六五）、称徳女帝が創建した当時の寺は、右京の一条三坊四坊にあり、東の東大寺と対蹠的な位置にあったものごとくである。東大寺はいうまでもなく聖武天皇の勅願によって建立された鎮護国家の大道場、ともに南都七大寺の一つである。その両大寺をまたいで立つ。これだけでも壮大な図柄である。

が、問題はこれから先だ。いったい、この両大寺をまたいで立つと、どんな格好になるか。その意義を指摘した注釈書は、残念ながら皆無である。平城京の略図（復元図）を見てほしい。そうすればすぐわかるのだが、時間がないので私が解析しよう。この両寺をまたいで立つと、中に平城宮がすっぽり入ることになる。両股の中央部に平城宮が隠れることになる。平城宮には天皇がおわす。王宮を股の中に入れ、両脚は鎮護国家の道場をふまえ、南のかた平城京を高所から見おろす格好になるではないか。

帝王の威を脚下にふみにじり、いや帝王を屈伏せしめて、王宮や王城を占領した姿ではないか。かほど不敵な格好はない。かほど不敬な姿勢もない。帝王に反逆し、その反逆が成功した姿に紛れもない。

ただし、全く違ったみかたもできる。この都は平城京であって、平安京ではない。伴氏の祖先は大伴氏だ。第五十三代淳和天皇の諱が「大伴」であつたので、同名を避けて爾来「伴」氏に改めたのだ。あの『万葉』の歌人、旅人や家持を輩出した古代の名族だ。大伴氏は武をもつて代々天皇家に仕えた家柄だ。天皇家を守つてきた家柄だ。だとすれば、東西の両大寺をまたいで立つ姿は、武をもつて平城京ににらみをきかせ、真ん中に天皇を守護して、皇室に刃向かう者あらば一刀のもとに斬り伏せんと構える勇姿ともとれる。奈良朝に至るまでの大伴氏の事績にかんがみれば、この解釈の方が正しからう。しかし、それはこの夢の合わせようによつては、どうともとれる余地を残す。さればこそ、夢は合わせ方が大切だ、となるわけだ。

五 種継暗殺事件

善男の祖父大伴継人は、桓武帝の延暦四年（七八五）九月、皇太子のために中納言藤原種継を射殺し、投獄されて獄中で死んだ。同じく例の中納言家持も、この事件の廿余日ほど前に死んでいたにかかわらず、連坐して除名の処分を受けている。

『三代実録』卷十三、貞観八年九月廿二日の条には、例の応天門放火事件の始末が記されている。これを大納言伴善男や、その子右衛門佐中庸らの大逆罪となし、一味の断罪が詳細に記されているのである。その末尾に、善男の家系や略歴・性格・才能についても、かなり詳しい説明を加えている。祖父継人・父国道については、次のように記されている。